

特集 環境住宅を考える



巻頭インタビュー/環境住宅プロデューサー 甲斐徹郎さん

提言、環境統合住宅。

甲斐さんからのご提案です。

「省エネと豊かさを同時に実現する家。
それが環境統合住宅」

省エネで快適な家から、
豊かに暮らす住まいへ。

私が「環境住宅」という考えに興味を持ち始めたのは、17年前のヨーロッパ視察がきっかけでした。当時エコ住宅の世界での趨勢を学ぶ目的で、北欧やドイツなどでの優れた建築の実例を見ることを期待して出かけたのですが、私が目にしたのは、住宅という建物の範囲をはるかに超えた「エコレッジ」というものでした。そこですでに高断熱高気密技術の導入や太陽熱の有効活用など、省エネ性と快適性の追求は当たり前で、その先のテーマとして、環境との共生や豊かなコミュニティを追求した世界が展開されていたのです。

その当時、日本では省エネと快適性を追求する高性能な住宅をいかに普及させるかが問われていた時期で、建物の範囲を超えた周辺環境との関係まで関心が向いていませんでした。この視察での体験は、私にとってまさに衝撃でした。そうした体験から、帰国後、私は、環境やコミュニティと共生した豊かな暮らし、そしてそのベースとなる住宅のあり方を模索するようになったのです。そうした模索の中で、住宅側の技術とその外側の環境とをいかにつなげるかを常に考え、試行錯誤を繰り返してきました。そうした経験を経て、たどり着いたのが「環境統合デザイン」という理論です。「環境統合住宅」という新しい家づくりの形態は、この理論から生まれました。

「環境統合」という考え方は、私たちの体を感じる体感原理に基づいて組み立てられています。身近な例を挙げましょう。例えば25℃の室内は快適なのに、25℃の水風呂は冷たい。どちらも同じ温度なのにどうして体感が違うのでしょうか。それは、

建築家に求められるのは、
多彩なプロを束ねる編集能力。

環境統合デザインの考えに基づいて、環境統合住宅をカタチに構築するためには、ランドスケープデザインと設備機器、断熱材や建具などの部材、そして建築とを、それぞれ独立させず、連携を図ることが重要となります。そのためには、部材メーカーの担当者や、研究者・設備技術者などの専門家に加えて、外構を担うデザイナー、建築家など住宅業界に関わる様々なプロフェッショナル間のコラボレーションが求められます。

環境統合住宅を実現する際に、建築家や施工者に求められるのは、そうしたコラボレーションを率いて、目的に向かわせる編集力です。そうして生まれた環境統合住宅には、従来の家にはない価値があります。それは「住宅」というハードとしての価値ではなく、そのハードの枠組みを超えて外へと広がる価値です。例えば、そこには、省エネで快適な室内空間があるだけではなく、街へとつながる緑豊かな環境があり、そのつながりが奥行きのある贅沢な景観を生み出し、同時にそのつながりは室内へと心地のいい風を送り込みます。そして、その環境は隣人の環境ともつながり合い、人と人との関係を育み、子どもたちの笑い声が絶えないはず。こうした従来のハードを超えた価値の提供者となること、それが住宅業界に関わる企業のマーケティング的な成功へとつながる道となるのではないかと思います。

夢は地球規模での
低炭素社会の実現。

環境統合住宅の目標は、そこに住む個々人の生活を豊かにす



(株)チームネット代表取締役
甲斐徹郎さん

1959年東京都生まれ。日本で数多くの環境共生プロジェクトをプロデュースし、その実践から独自の理論として「環境統合デザイン論」を構築し提唱。戸建から高層住宅まで低炭素都市開発の総合コーディネイトを担う。立教大学大学院非常勤講師、中国江蘇省昆山市花橋経済開発区顧問。

体感的な心地よさを実現、
それが環境統合デザイン。

環境統合デザインは、住まいとその周辺の外環境との「関係性」をデザインすることで、室内の快適環境を制御し、かつ住居の内外の「体感的な心地よさ」の実現を目指すものです。

環境統合デザインでは、建築や環境を構成する要素（例えば風通しのいい住空間や、そこに搭載された高性能な設備機器、外部の植栽等）は独立したのではなく、相互に連携し合うことで、体と環境との関係が取り持たれ、その相対的關係が体感原理に従って心地のいい体感を生みだします。特に、外環境の主役である緑は、閉塞した各住空間を外へと開き、街の環境と暮らしをつなぎ、さらには近隣住人との人間関係をも育む重要な役割を果たす要素となります。

ることにとどまらず、その連鎖によって豊かな都市の環境を生ずることにあります。高性能な設備機器が普及していても、そこで生み出される快適さが室内だけにとどまっていれば、環境の担い手不在の物質化した都市が広がり、個人は、その都市で他者とのつながりを見いだせず孤立してしまいます。都市の環境を再生し、そのことが大きな魅力となって、住宅業界が潤う。それが連鎖すれば、低炭素社会は都市から国レベル、そして地球規模で実現する。それは夢ではありません。実際に、環境統合デザインは、中国での低炭素都市創造の切り札として応用が始まっているのです。日本の住宅が機能性や利便性を求める段階から一歩先に進み、環境を考える住宅へとシフトする。その潮流が豊かなライフスタイルを確立する基盤となることを心から願っています。

甲斐さんプロデュースの 環境統合住宅の一例 「緑風の家」



写真: © チームネット提供

甲斐さんの環境統合デザイン論に基づいて誕生した、環境統合住宅の一例です。「緑風の家」は2009年に、日本一暑い都市として有名になった埼玉県熊谷市で「クーラーに頼らない快適な住まい」を実践したことで話題となった家です。外が38℃でも室内は24℃という快適さ。各種の高性能な設備機器の導入に加えて、環境統合デザインでその夢を実現させました。

次のページでは、環境住宅の事例をご紹介します。